

### 3 北方領土の返還要求運動

北方領土の返還要求運動は、第二次世界大戦が終わった年の 1945 年（昭和 20 年）秋、北方領土の元島民を中心に、根室で始まりました。

その後、この運動は、北海道から全国各地に広がり、人々の関心もしだいに高まってきました。



北方領土返還要求署名運動  
（さっぽろ雪まつり会場）

北海道をはじめ、多くの県や市町村では、返還要求運動を強く進めるため、署名運動を行ったり、北方領土展を開いたり、また、実際に北方領土を目で見る視察団を根室に送るなどの事業を活発に行い、一人でも多くの人々に、北方領土についてわかってもらおうと、熱心に活動を続けています。



毎年 8 月の強調月間に開催される「北方領土返還要求北海道・東北国民大会」



毎年 2 月 7 日の北方領土の日で開催される「北方領土フェスティバル」（さっぽろ雪まつり会場）  
なお、2021 年は新型コロナウイルス感染症の影響により中止となりました。

北方領土に近い根室市や標津町などには、北方領土のことがら、なんでもわかるように、「北方資料館」、「望郷の家」、「北方館」、「北方領土館」などの施設がつくられ、全国各地からきた人たちに利用されています。



標津町の北方領土館



館内の様子

1981年(昭和56年)9月には、全国からの募金によって、納沙布岬に、北方領土の返還を願うシンボル像「四島のかけ橋」が建てられ、祈りの灯が赤々と燃え続けています。



シンボル像「四島のかけ橋」

根室市内には、北方四島（歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島）に住むロシア人との交流の場として北海道立北方四島交流センター（ニ・ホ・ロ）がつけられています。展望室からは国後島や知床半島を間近に見ることができ、展示室では北方領土の歴史や今の様子を映像などで学ぶこともできる施設となっています。

（ニ・ホ・ロとは、日本（ニ）とロシア（ロ）をつなぐ北海道（ホ）の交流拠点施設の意味です）



北海道立北方四島交流センター（ニ・ホ・ロ）

北海道では、北方領土が間近にあることから、返還要求運動の先頭に立って、政府や国会に対して強く働きかけ、北方領土についての様々な問題が解決されるように努めています。この他にも、道外の各地に出向いて住民大会、講演会、北方領土展などの開催や、国外においても、世界の国々が集まって開かれる会議に使節団を送って、北方領土の返還を訴えました。また、モスクワ、サンクトペテルブルクやロシア極東地域などに対話交流使節団をおくって、北方領土問題についてお互いに理解を深めるための話し合いを行う使節団派遣事業も行いました。最近では、ロシアの大学生や研究者を日本に招いて、日本の大学生や研究者と意見交換を行い、お互いの理解を深める事業を行うなど、国の内外で、幅の広い運動を進めています。



ロシア連邦議会連邦院と対談する使節団の一行  
(ロシア連邦議会連邦院)

一方、政府も、北方領土の返還についてロシアと話し合うなど、一生懸命努力を続けています。

1981年(昭和56年)1月に政府は、毎年2月7日を「北方領土の日」とすることを決め、全国各地で、この日を中心に北方領土の問題を正しくわかってもらうための行事が開かれるようにしました。

この2月7日という日は、1855年(安政元年)伊豆半島の下田で日本と当時のロシアとの話し合いがもたれ、両国の国境を択捉島とウルップ島の間と決めた意義のある日です。(日露通好条約)



(令和2年 北方領土返還要求全国大会：東京)

1981年(昭和56年)9月には内閣総理大臣としては初めて、当時の  
鈴木首相が北方領土を視察し、2001年(平成13年)4月には森首相  
が北方領土を視察しました。また、2004年(平成16年)9月には小泉首  
相が北方領土を洋上から視察し、現地の人たちとの対話集会では、「北  
方領土問題の解決なくして日ロ平和条約の締結はない。」と述べられる  
とともに、北方領土返還の願いや期待を直接聞かれました。



内閣総理大臣として初めて北方領土を視察する鈴木首相

北方領土の返還は、<sup>むずか</sup>難しい問題です。国民一人一人がこの問題について、正しく理解し、日本の立場を、ロシアをはじめ、その他の国々に<sup>ねば</sup>粘り強く主張していくことが非常に大切です。

そのためには、何年かかろうともその実現を目指して、より活発な返還要求運動が進められるようにし、若い人たちに引き<sup>つ</sup>継いでいくことが重要です。